

放浪する武蔵

——『宮本武蔵』から『バガボンド』『MUSASHI 武蔵』へ——

山下 興 作

はじめに

宮本武蔵という名を聞いて、どのようなことが連想されるだろうか？「江戸初期の剣客。…… 武道修行のため諸国を遍歴して二刀流を案出し、二天一流の祖。佐々木巖流との試合が名高い。」これは広辞苑からの引用だが、一般に行きわたっている武蔵像もおおよそそのようなものであろう。

歴史上に実在する人物としての宮本武蔵は、1584(天正12)年に生まれ、1645(正保2)年に61歳で亡くなっている。つまり本能寺の変の2年前に生まれ、島原の乱の7年後に亡くなったということになる。出生地については播磨説と美作説があり、判然としない。その生涯についても、あまり詳しくはわかっておらず、断片的にいくつかの出来事が史実として伝わっているばかりである。その中に、少年時代に有馬という武芸者を殺したこと、京都の吉岡道場破り、奈良で宝蔵院流槍術を学んだこと、先にも触れたように巖流島での佐々木小次郎との決闘などがある。そのほか豊臣氏が滅亡した大阪の陣にも参加したともいわれる。最近の研究によって、島原の乱に参加した武蔵は、騎馬隊長として本陣に詰めていたことも明らかになった(朝日新聞02・7・23)。もっとも確実なことは、晩年になって細川氏の客分として召し抱えられ、熊本で暮らしたことである。その間、靈巖洞にこもって書いたのが『五輪書』だった。

この『五輪書』は、武蔵最晩年の書で、それまでの剣の修行で体得したものを禅思想の強い影響を受けながら集大成した兵法書であるが、彼の経歴を示す事柄もいくつか含まれている。その中に生涯で60回以上試合をしながら一度も負けたことがないと語っており、これが後の武蔵伝説の源流となっているようだ。

以上見てきたように、歴史上の宮本武蔵には謎の部分が多い。しかし、本稿の目的はその謎を解くことではない。謎が多いということは同時に後の人間が想像力を発揮する余地も大きいということでもある。事実、これまで有名無名多くの作者の手によって様々な武蔵像が描かれてきた。無論それは武蔵の実像とは異なるものであろうが、史実よりも虚構に重きがおかれる場合、その虚構の中にこそ、作者をはじめとするその時代の一般大衆が武蔵に託した夢や願望を読み取ることができるだろう。

そこで本稿では、主として吉川英治の『宮本武蔵』と井上雄彦の劇画『バガボンド』、NHK 大河ドラマ『武蔵 MUSASHI』の三者を比較し、そこから今日のわたしたちに

とって<武蔵>とは何者なのか、いまという時代は<武蔵>に何を求めているのかを読み解くことを試みたい。

吉川英治以前の武蔵像¹⁾

宮本武蔵は「生涯不敗の剣客」「歴史上最強の剣豪」として伝えられた。近世から明治時代にかけて宮本武蔵の活躍の舞台は歌舞伎や浄瑠璃もしくは講談や実録本の世界だった。その嚆矢は1737(元文2)年に大坂で大当たりし、翌年、江戸市村座で上演された藤本斗文「敵討巖流嶋」であった。この狂言では武蔵＝岡本武者助が自分と間違えて殺された侍の子供を助太刀して、敵である佐々木巖流を討ち果たすという筋書きであった。続く1746(延享3)年、浅田一鳥の人形浄瑠璃「花筏巖流島」では、佐々木巖流が武蔵＝月之助自身の親の敵となる。以後武蔵が諸国を遍歴して巖流島において父の敵の小次郎を倒すというパターンが1911(明治44)年の立川文庫第九篇『武士道精華・宮本武蔵』に至るまで飽くことなく繰り返される。そして、その過程で狒々退治や塚原ト伝との鍋試合などが遍歴途中でのエピソードとして付け加えられていった。つまりこの時点までの武蔵は講談や芝居のごくありふれたヒーローの一人に過ぎず、今日でいえばテレビドラマの水戸黄門のイメージに近い存在であったといえよう。

こうした類型的ヒーローから武蔵を解放したのは1924(大正13)年の本山荻舟「二刀流物語」だった。本山荻舟は当時としては当たり得るだけの資料に当たり、おそらくは初めて武蔵を歴史の中の人物として位置付けた作品を作り上げた。ただし、そこでも武蔵は天下無双の兵法者として描かれているという点では、これまでの武蔵伝説と同じである。

こうした比類なき剣豪としての武蔵像に疑問を投げかけたのが大衆小説家直木三十五だった。1932(昭和7)年、直木は、武蔵の生涯は晩年を除いて山気と自己喧伝に満ちたものであったと批判した。直木がそう主張する根拠として挙げているのは、吉岡一門との対決も吉岡方の記録では相討ちであり、また勝てる相手としか戦わなかったというように取れる言葉を残していることなどである。これに対して菊池寛は武蔵以外60回を越える真剣勝負を行なった剣客はいないこと、また彼が残した著作をみれば武芸ばかりでなく人間的にも傑出していたと反論した。この論争は「宮本武蔵論争」と呼ばれ、マスコミでも話題になった。この論争を受けて、菊池寛に近い立場をとる吉川英治が直木の論に対する答えとして、後年書いたのが『宮本武蔵』であったと言われている。

吉川英治の『宮本武蔵』

「小次郎が信じていたものは、技や力の剣であり、武蔵の信じていたものは精神の剣であった。それだけの差しかなかった。」

これは巖流島の決闘が武蔵の勝利に終わった作品のラストからの引用であるが、ここに吉川英治が『宮本武蔵』に託したメッセージが凝縮されている。

この物語は、武蔵という17歳の少年が関が原の戦いで落ち武者となったところから幕をあける。その後、故郷宮本村の千年杉に吊るされながらの沢庵和尚と問答や三年にわたる姫路城開かずの間での和漢書の読書と瞑想の日々を経て、人として再生し武者修行に出た宮本武蔵は、般若野や三十三間堂、一条寺下り松で吉岡一門との死闘を繰り広げたほか、宝蔵院での槍の稽古を通じ日観和尚から殺気を矯めることを教えられたり、穴戸梅軒や夢想権之助と出会ったりと様々な経験を積む。また、この間、本阿弥光悦親子や吉野太夫と出会って剣の技量だけでなく、心に余裕を持つことの大切さを学ぶ。この他にも、柳生石舟斎、武蔵を慕うお通や仇と付け狙うお杉婆、幼なじみの又八、江戸の無法者半瓦一家、後にお通の弟だと判明する伊織少年や愚堂和尚など多彩な人物が絡みながら、彼の修行の日々は続き、終幕の小次郎との巖流島の決闘へと至る。

そこに描かれる武蔵の人生行路は縄田一男氏が指摘するとおり、「彼が二天一流の理を知り、剣禅一如の境へ到達する苦悩の歴史に他ならない」（「それぞれの武蔵」14）。吉川英治自身、『随筆宮本武蔵』の中で、

剣をとおして、彼（武蔵）は人間の凡愚と菩提を見、人間という煩惱のかたまりが、その生きるための闘争本能が、どう処理してゆけるものか、死ぬまで苦勞してみた人だ。乱麻殺伐な時風に、人間を斬る具とみなされていた剣を、仏光ともみなし、愛のつるぎともして、人生の修羅なるものを、人間苦の一つの好争性を、しみじみ哲学した人だ（縄田 14）

と、主人公武蔵を評している。

こうしてみると、この作品は野生児武蔵が、遭遇するさまざまな苦難や迷いを、周囲の人間の助けを借りながら克服し武蔵へと成長していくビルドゥングスロマンの一種であるといつてよいだろう。ただ一般のビルドゥングスロマンと異なるのは、主人公が修行の名のもとに自ら苦難を求め、それをひとつひとつ打ち破っていくことによって自己完成を目指す姿が描かれていることであろう。この点に着目するなら、求道型小説とでも呼ぶほうがふさわしいように思われる。

この武蔵の常に死と対峙するような求道的な修養・克己・忍耐の姿が連載開始の1935（昭和10）年当時から広く支持を集めたのは、2・26事件から第二次世界大戦へと至る時代にあつて日本人の誰もが生死に直結する状況下に置かれていたことと無縁ではあるまい。また、戦後GHQの出版統制のためしばらく絶版になっていたが、1949（昭和24）年に復刊されるや、再び大ベストセラーになった背景にも、闇とインフレと食糧難という戦争とは別の意味で明日をも知れぬ状況下に置かれた人々にとって、先に述べたような武蔵の生き様が精神的バックボーンとして求められた結果と考えられる。

ともあれ、吉川の『宮本武蔵』は日本人の抱く宮本武蔵像に決定的な影響を与えた。この作品を読んだことのあるなしに関わらず、今日わたしたちが思い浮かべる武蔵のイメージは、ほぼすべてこの本によって作り上げられたといつても過言ではない。

吉川が没したのは1962(昭和37)年。ちょうどこの頃日本は高度経済成長期に突入し、国民生活も困窮を脱していく。軌を一にするかのように『宮本武蔵』も次第に読まれなくなっていく。それと入れ替わるように登場し、人々の熱狂的な支持を集めたのが司馬遼太郎の『竜馬がゆく』(1963(昭和38)年)だった。この時代人々が竜馬の姿に求めたものは、武蔵のような孤高の求道者の姿ではなく、いかに時代を先取りし、いかに組織を動かしていくかを体現した理想的リーダー像であった。高度経済成長期からバブル全盛期にかけて、歴史小説にこのタイプの主人公像が好まれたことは、その後山岡荘八の『徳川家康』(1968(昭和43)年)や津本陽の『下天は夢か』(1989(平成元)年)がベストセラーとなったことから裏付けられる。

武蔵復活

この間、思い出したようにテレビドラマの題材に取り上げられるほかは特に話題に上ることもなかった武蔵であるが、90年代に入りバブルが崩壊すると復活の兆しを見せ始める。1990(平成2)年に北大路欣也の主演でテレビ東京の「12時間超ワイドドラマ」として『宮本武蔵』が、1992(平成4)年には、小次郎に渡部謙、武蔵に滝田栄を配し、巖流島の決闘の裏には鉄砲装備をめぐる細川藩内の葛藤があったという、これまでにはないユニークな視点から描かれた『巖流島 小次郎と武蔵』(NHK ジェームス三木脚本)が立て続けに放映される。

また、記憶に新しいところでは、2001(平成13)年にテレビ東京の正月特番、8時間ワイド時代劇『宮本武蔵』(上川隆也主演)や2003(平成15)年NHKの大河ドラマ『武蔵 MUSASHI』(市川新之助(海老蔵)主演)が挙げられる。

武蔵を直接の題材として扱ったものではないが、2000(平成12)年の9月から翌年の3月にかけて放映されたNHKの朝の連続テレビ小説『オードリー』のクライマックスで、映画監督を目指すヒロイン・佐々木美月(岡本綾)が撮っていたのが宮本武蔵の映画だったことも上で見た一連の流れと無縁ではあるまい。

活字の世界でも武蔵は復活を遂げる。特に大河ドラマの決定が伝えられると、吉川英治の『宮本武蔵』が従来の文庫だけでなく大活字本など新たな装いで読めるようになったほか、武蔵を特集した雑誌やムック、様々な武蔵関連本が新刊または復刊として書店にならべられた。

このように再び注目を集めるようになった武蔵だが、この「武蔵ブーム」を決定付けたのが井上雄彦の劇画『バガボンド』だ。1998年の『週刊モーニング』に連載開始直後から若者を中心に絶大な人気を獲得した話題作で、翌年3月から単行本として順次刊行され、2004年9月現在で第20巻まで進んでいる。この間、講談社漫画賞、文化庁メディア芸術大賞、手塚治虫文化賞マンガ大賞を受賞。日本のみならず、韓国、香港、シンガポール、タイ、台湾などでも翻訳出版されるなどの人気作である。

新しい武蔵像

『バガボンド』は吉川英治の『宮本武蔵』を原作としてはいるが、その忠実な劇画化というにはほどとおく、キャラクター設定もストーリー展開もかなり異なっており、井上雄彦のオリジナルと呼んだほうがいい作品となっている。

関が原での敗北から始まり、辻風典馬を首領とする野武士の襲撃からお甲・朱美母娘を守ったりするのは吉川版と同じである。また、その後宮本村に帰り、お杉婆に逆恨みされるのも同じだ。お通と沢庵に捕まり、千年杉に吊るされた武蔵と沢庵の問答もあるが、武蔵を吊るした綱を切ったのは彼の後を追ってきた典馬の弟、辻風黄平である。また、吉川版では武蔵の再生に大きな役割を果たす姫路城での3年にわたる幽閉は全く出てこない。吉岡道場の当主清十郎のキャラクター設定も大きく異なり、ここでは無益な戦いを避けるために軟弱そうな風体・言動で腕前を隠している人物として登場する。吉岡の高弟祇園藤次も吉川版よりかなり好意的に描かれ、より大きな役回りを与えられている。武蔵の父新免無二斎の存在も大きく、武蔵が父無二斎を克服していく親子の葛藤のテーマは、むしろ吉川版より強調されている。

第5巻から4巻にわたって繰り返される宝蔵院胤舜との対決は、吉川版には全くない井上の創造であるが、これが一つのクライマックスとなっている。胤舜に敗北した武蔵はいったん逃げのびる。その敗北に打ちひしがれる武蔵だが、宝蔵院流槍術創始者胤栄の手ほどきを受け復活、再び胤舜と立ち合い、勝利する。この戦いの中で武蔵は自分の弱さを知り、本当に強いとはどういうことなのかを学び取る。

続く柳生四高弟や穴戸梅軒こと辻風黄平との立ち合いの通じ、天下無双とはただの言葉に過ぎないこと、また生き抜くことの重さを知らされる。

こう書くと扱われるエピソードの異同はともかくとして、大筋においては吉川版と大差ないように見える。確かに次々と現れるライバルとの戦いの中で人間的に成長していく武蔵を描くという点では同じであるが、いくつか重要な相違点がある。

吉川版では姫路城幽閉の間に全く別人になってしまったかのような急激な成長を遂げ、人格的にはすでに完成の域に近い状態で城を出る。そのためそれ以後の修行はその人格にさらに磨きをかけるためのものとなり、武蔵の求道者的性格が前面に押し出されてくることになる。

それに対して『バガボンド』では、先に触れたようにこの姫路城幽閉のエピソードがない。その結果、武蔵はひとつひとつの立ち合いを通し、順を追ってゆったりと成長していくことになる。

また、『バガボンド』の武蔵は結構弱い。吉岡道場では清十郎に軽くあしらわれ、宝蔵院では胤舜に追い詰められて逃げ回る。柳生では一見無防備の石舟斎に挑もうとするが、圧倒されてできない。そして、その都度武蔵は自分の弱さを思い知り、自己を見つめなおすのである。

櫻井良樹氏は『宮本武蔵の読まれ方』の中で、この弱い武蔵に対し読者が非常に強い共感を示していることを指摘し、井上雄彦の公式ホームページの掲示板から次のように引用をしている。

胤舜に追いまくられて錯乱しながら逃げる武蔵があわれでした。自負心が強いだけにまさかの醜態。そのうえ敵の師に優しくされて羞恥と情けなさに打ちのめされたでしょう。でも絶望したり自暴自棄になったり、あきらめないのが武蔵の生命力の強さしぶとさですね。……(簡単に悟っちゃだめだよ)(193)

さらに櫻井氏は、井上の描く武蔵の「弱さの中で懸命に生きて行こうとする姿が感動を呼んでいる」とし、それ比べて吉川の描く武蔵は精神的に強すぎるため、「現在の人には息が詰まってしまって、ついて行けない」(櫻井193)のではと推測している。

作者の井上も『バガボンド』連載開始直前のインタビューで、武蔵という人間像について、吉川以降「剣聖」に祭り上げられた武蔵をその高みからひきずりおろして、「より人間らしく、地べたをはいずりまわるような人物にしたい」と語っているが、そうした新しい武蔵像が、より読者の感情移入を容易にし、共感を得ているとあってよいだろう。

ポスト・モダン化する武蔵

『バガボンド』の武蔵に共鳴しているのは読者ばかりではない。そこでは武蔵と戦う相手も武蔵に共鳴しながら生きている。胤舜も辻風黄平も、吉岡清十郎・伝七郎兄弟も、柳生兵庫助も祇園藤次も強くなることを目指して修行しているが、彼らは何かしら武蔵と相通じるものを感じている。まさに「強くなりたいと思う人々が、いっぽうでは一人では生きられないことを強調しているように思われる」(櫻井194)。この点、武蔵を孤高の剣士として描き、「独行道」を歩ませた吉川英治とは決定的に異なっている。

最近、学校生活からも就職からも自ら身を引いてしまった「ニート(NEET=Not in Education, Employment, or Training)」と呼ばれる若者の急増が注目されている。その背景には日本の雇用形態の変化があるとも言われているが、玄田有史氏は、一度も求職活動をしたことのないニートを調べた結果として「人付き合いなど会社生活をうまくやれる自信がない」「なんとなく」「自分の能力・適性が分からない」の回答が非常に多いことを挙げ、人間関係への自信不足を根本的な理由と指摘している。さらに玄田氏は「自分らしさが発揮できないのは不幸とか、個性がない人生は無意味だとか、そういう意識が今の子には強い。オンリーワンになりたいって」と今日の若者の特徴を述べている。(高知新聞 2004. 8.25.) そんな若者たちにとって、まさにオンリーワンへの道を歩みながら互いに共鳴しあえる『バガボンド』の登場人物達の生き様は、一種の憧れにも似た存在なのかもしれない。

ではなぜ吉川版の武蔵は独行道を歩むことができたのだろうか? ここでも鍵となるのが姫路城での幽閑である。この間武蔵は古今の和漢書を読みふける。万卷の書物はこれ

まで共同体に蓄積され確立されてきた価値観を意味し、彼は幽閉という試練を通してそれらを身につけ、人間としての再生を果たす。言い換えるなら、武蔵はこの読書と瞑想の日々という通過儀礼を経ることによって、無事共同体への参入を許される。このとき宮本武蔵という新たな名を与えるのが姫路城主池田輝政という社会的上位者であることが、それを象徴的に示している。つまり武蔵はこの段階で共同体内にあらかじめ居場所を確保しているわけで、だからこそ何の迷いもなく安心して「独行道」を歩むことができたのだ。

吉川英治の『宮本武蔵』が出版された戦前から戦後にかけてはまだ共同体が機能していた時代であり、「家族」とか「国家」といった共同体に根を下ろした人間が真剣に人生の意味を、共同体で共有される確固たる価値観に従って、あるいは挑戦しながら、求めていくという物語が説得力を持ちえた。

しかし、もはやすでに共同体が崩壊しかかり、個が共同体から分離して浮遊している今日にあっては、そのような求道的人間像はリアリティを失ってしまった。こうしたポスト・モダンの状況では、個人の成長、生や死などは、そのあるべき姿や意味付けを共同体には期待できず、個々人が各自で求めてゆかねばならない。いわば今日はだれもが自分の居場所を求めて彷徨っているのだ。

そんな時代に井上雄彦によって新たな生命を吹き込まれた武蔵はバガボンド＝放浪者とならざるを得なかった。『バガボンド』で姫路城幽閉のシーンが抜け落ちているのには、そうした時代の要請があるように思われる。

『バガボンド』で彷徨っているのは武蔵だけではない。本位田又八、宝蔵院胤舜、宍戸梅軒（＝辻風黄平）、柳生石舟斎、宝蔵院胤栄……。たびたび挿入される回想シーンによって描かれる彼らの過去は、彼らもまた自分の居場所を求めて彷徨うバガボンドであることを示している。そして、石舟斎と胤栄が上泉信綱と刃を交えることによって「無刀の境地」という居場所を見つけていったように、胤舜や梅軒（＝黄平）も武蔵との立ち合いをきっかけにそれぞれの居場所を見つけていく。

胤舜も武蔵同様強くなること楽しみとし、戦っている瞬間のみ生きていることを実感できる人物だった。一度は武蔵を窮地に陥れた胤舜だが、二度目の立ち合いでは死闘の末武蔵に敗れる。死の淵を彷徨いながら忘れていた己の来し方を振り返った胤舜は、そこで自分が生きることの意味を悟る。別れ際「また会おう、今度は、命を奪い合うことなく」（第8巻）と武蔵に声を掛ける彼からは以前のような人を遠ざける殺気は消えており、彼の価値観の転換が伺える。その後十字槍を師胤栄に返し寺に戻った胤舜は、勢ぞろいした僧侶たちの前で「宝蔵院流槍術二代目胤舜である！」（第8巻）と高らかに宣言する。その姿はすがすがしくさえあり、この瞬間に彼が新たな人生のスタートを切ったことを明示している。

一方、兄典馬を殺されて以来武蔵を付け狙っていた辻風黄平だが、その動機は兄の仇を討つことではなく、ただ強いものと戦いたいということだった。彼もまた強くなり、他人の命を奪うことにしか生きる意味を見出せない人物だった。本物の宍戸梅軒を倒し

た後、その遺児竜胆から鎖鎌の技術を盗み、自ら梅軒を名乗る。そして、その鎖鎌で武蔵に勝負を挑み敗れる。二度と鎖鎌をもてない身体となった梅軒(=黄平)だが、「これで戦わなくて済む。殺し合いの螺旋から俺は降りる」(第12巻)といい、竜胆を守って生きるために武蔵に命乞いをする。それまで弱者とは強者に破れるためだけの存在であり敗北はすなわち死を意味すると信じていた彼のこの言動は、武蔵の心に重くのしかかる。

皮肉なことに、彼らが居場所を見つけるきっかけを与えた武蔵は、いまだそれが果たせず、ひとり放浪を続ける。

『バガボンド』では武蔵最大のライバル、佐々木小次郎もポスト・モダン的な状況を生きることに苦悶する。第14巻から第20巻までは小次郎編と題し、かれの出生から成人までの生い立ちが語られる。ここでの小次郎は吉川が描く「技や力の剣」のみを求める人間ではない。井上が創造した小次郎は、両親を知らず、生まれながらの躰というハンデを背負いながら鐘巻自斎や伊藤一刀斎のもとで修行を重ねていく。彼もまた生涯をかけて、強くなること、生きることを求めて放浪するバガボンドである。

『バガボンド』は刊行途中であり、いまだ二人は互いの存在を知らない。今後この二人がどのように出会い、巖流島への道を歩んでゆくのかかわからないが、その日まで放浪の日々が続くことだけは間違いのないだろう。

現代人としての武蔵

2003(平成15)年のNHK大河ドラマ『武蔵 MUSASHI』は、歌舞伎界から市川新之助(現海老蔵)を主役に迎え、小次郎にTOKIOの松岡昌宏、お通に人気者の米倉涼子、武蔵の父・新免無二斎にビートたけし、お杉婆に中村玉緒、又八に堤真一、他に宮沢りえ、かたせ梨乃、内山理名、渡瀬恒彦、江守徹、中村勘九郎、中井貴一、高嶋政伸、仲間由紀恵、寺島しのぶらの豪華キャストで「物語の劇的な展開を重視したエンターテインメント性、フィクション性を色濃く打ちだす」(NHK大河ドラマ「武蔵 MUSASHI」関連情報 NHK熊本放送局)ことを基本コンセプトとして企画された。

そこに描かれる武蔵像は、「ワイルドでエネルギッシュ、最強にしてハートフル」な「サムライヒーロー」(『武蔵 MUSASHI』制作発表資料)と『バガボンド』のそれと重なり合っている。

姫路城に幽閉はされるもののわずか数日で逃げ出していることが示しているように、『武蔵 MUSASHI』でも、武蔵は共同体から分離した放浪者として描かれている。ただし、こちらの武蔵は『バガボンド』に比べ、若さと荒々しさの中にも凜とした品性が感じられる点で異なるが、これは新之助(海老蔵)の役作りに負うところが大きいようだ。

宝蔵院で二度にわたって胤舜と立ち合う点や石舟斎との対面などのエピソードや武蔵以外の登場人物も丹念に描いていく手法など、『バガボンド』と共通する点は多い。そして、そこから浮かび上がってくるのはやはり誰もがふわふわと浮遊しながら自分の居

場所を探している時代状況である。

『バガボン』が未完のため、単純な比較はできないが、時代認識という点において『武蔵 MUSASHI』はより踏み込んだ解釈を示している。そのための仕掛けが、結末を巖流島とするのではなく、柳生宗矩との関係を軸にその後の武蔵の生き方を描いていることだ。

『バガボン』でも関が原の戦いで戦死者がみんな鉄砲や弓矢でやられているのを目の当たりしにした夢想権之助の口から漏れる「戦はもう…剣の戦いではないんですね。……剣による武勲など望めぬ世」(第18巻)という言葉からは的確な時代認識がみられるが、『武蔵 MUSASHI』は大きな時代の転換点に立った二人の人間が見せる対応の違いをより詳細に描いてみせる。

巖流島の決闘の後、武蔵は宮本村に戻り、剣を鉞に持ち替え、お通とともに村人から見捨てられた荒地を耕す。その中で自然に従い生命を育むことの喜びを知る。それを契機に人の命を奪うのではなく活かす剣の道について考え始める。やがて近隣の農民が彼の周辺に集まるようになり、その噂が遠国まで広まると戦を逃れた人々が彼を慕ってやってくる。

はじめは武蔵達二人の小屋だけだったのが、来るものは拒まず受け入れていくうちに、小さな集落となり、いつしか村といえるほどにまで大きくなっていった。どの領主のものでもないその村は農民たちにとって一種の理想郷であったが、やがて宗矩が放った刺客により壊滅させられる。武蔵になんの野心もないことは宗矩にも分かっていたのだが、將軍を頂点とする整然たる支配体制を築こうとする最中であっては一切の例外を認めるわけにはいかなかったのだ。

宗矩にとって兵法とは治国、つまり政治に活かしてこそ意味のあるものであり、そのためには権力の中枢に近づかねばならなかった。武蔵にとって兵法とは自己が生き抜く術であり、身近なものを守るためのものであった。

同じように剣豪として知られながら、あくまで個として剣の道を活かそうとする武蔵と將軍家兵法指南役として己を殺して徳川のために歩み続ける宗矩。ともに戦のない世を夢みながら信じる道の違いのためふたりは対立を深めていく。

大坂夏の陣に宗矩が参陣していることを知り、武蔵は単身宗矩の陣に乗り込む。直接剣を交え、宗矩を追い詰める武蔵。しかし、武蔵は宗矩の命を奪わず、己とは異なる剣の道に生きるものがいることを心に刻んで置くようにと言い残して去っていく。

江戸幕藩体制の確立期という時代の転換点に立ち、変化を先取りすることで栄達を遂げた宗矩に対し、「武蔵の生涯は混沌とした時代の波に翻弄される庶民の姿そのもの」(NHK大河ドラマ「武蔵 MUSASHI」関連情報)である。

今日もまた時代は大きな転換点にあり、人々は変化への対応を迫られている。しかし、すべての人がうまく時流に乗れるわけではない。むしろ多く人は、このままでは時代に取り残されるという漠然として不安をもってはいるものの、どうすればいいのか分からず、これまで慣れ親しんだ価値観や生き方を捨てきれないでいる。そうした人たちに

とって『MUSASHI 武蔵』の武蔵は共感を呼ぶ存在であり、その武蔵がエリートである宗矩と互角以上に戦う姿に快哉を叫んでいたのだろう。

先行きの見えない時代を舞台に、こうしたキャラクターに共感が集まるという傾向は、NHKの大河ドラマが2004年『新撰組』、2005年『義経』といずれも時代の流れからは取り残されながらも自分の信じる道を懸命に歩いていく人物を主人公としていることから読み取れる。

『MUSASHI 武蔵』の終幕、戦いを終え、終焉の地熊本で武蔵がみせる穏やかな笑顔は、自分もまたそうした晩年を迎えたいと願う視聴者の思いを映し出しているように思えてならない。

むすび

かつて桑原武夫らグループはインタビューやアンケートによって日本人大衆が吉川英治の『宮本武蔵』のどこに共感しているかを調査し、その結果を『「宮本武蔵」と日本人』として発表した。その結論は修養という日本人に伝統的な倫理観に大衆が共感しているというものであり、近代化の進展に伴い人々の意識が都会化するにつれて、家族主義・共同体主義・克己的努力重視といった農村型の「武蔵イデオロギー」は衰退に向かい、したがって『宮本武蔵』も読まれなくなるだろうと予想した。

そして桑原らの予想通り、『宮本武蔵』はしだいに読まれなくなった。しかし、武蔵が人々に忘れ去られたわけではなかった。事実、時代の空気を取り込みながら、1990年代に姿を変えて見事な復活を遂げたことはこれまで見てきたとおりである。

吉川が『宮本武蔵』を手がけたのも2・26事件前夜から戦中・戦後という時代の転換点であった。そして今日。こうしてみると、時代が転換点に至ったとき宮本武蔵という人物にスポットライトが当たるようである。しかも、その時々時代の空気を存分に反映して。

今日の武蔵ブームがいつまで続くかはわからない。しかし、たとえ今回のブームが去ったとしても、また時代の要請を受け、姿を変えて復活してくることだろう。武蔵が放浪をやめる日はまだまだ訪れそうもない。

(註)

- 1) この項については、縄田一男「それぞれの武蔵 小説作品に見る展開」『武蔵と日本人』(NHK出版 2003)に負うところが大きい。

引用文献

- 井上雄彦『バガボンド』1～20巻（以下続刊） 講談社、1999～2004年（刊行中）
桑原武夫『『宮本武蔵』と日本人』『武蔵と日本人』 NHK 出版、2003年
桜井良樹『宮本武蔵の読まれ方』 吉川弘文館、2003年
縄田一男「それぞれの武蔵 小説作品に見る展開」『武蔵と日本人』 NHK 出版、2003年
吉川英治『宮本武蔵』（『吉川英治歴史時代文庫』） 講談社、1989年
NHK『武蔵 MUSASHI』制作発表資料 2001
NHK 熊本放送局「NHK 大河ドラマ「武蔵 MUSASHI」関連情報」<http://nhk.or.jp/kumamoto/musashi/role.html>